

フレッシュマン・ゼミ（山田晴通）2009.05.25.

報告者：山田晴通

## 速水敏彦(2006):『他人を見下す若者たち』 はじめに/おわりに 第1章

はじめに/おわりに...著者自身による、本書の狙いの説明

はじめに (pp.3-9)

日本人の感情・やる気が変わった (p.3)

意欲・動機づけが変化した？ 若者たちや大人の「怒り」、ポジティブ思考の強要...*etc.*

若者、負け組の「他者軽視」 (p.5)

やる気の背後にある「心性」

著者の仮説：「以前に比べて人々は他人を見下し、他者軽視・軽蔑をいとも簡単にするようになる。

この他者との関係の捉え方が自分自身の捉え方にも影響を及ぼし、さまざまな出来事の際に生じる感情ややる気のあり方そのものを規定する」 (pp.5-6)

少子化、ITメディアの影響 → 仮想的有能感 (他者軽視によって支えられる)

<似ているが違う> 自尊感情 (自分の過去の経験に規定される...自分への満足感、自信)

現代人への警鐘として (p.8)

最近の人々の感情ややる気を、仮想的有能感から考える

「現代人の心の中にいつのまにか潜んでしまった」

「気づかずにいると取り返しのつかないことになるという危機感」

おわりに (pp.213-214)

「若者の物の見方や感じ方、行動の仕方に私自身が疑問を感じるようになって久しい。」...違和感  
五木寛之「今、人間は感情が溜れていると思う」\*

「私自身の思い込み」を心理学に織り込む ... 「心理学会で十分に認められたものとは言えない」

「一定の実証的研究」

## 第一章 感情が変わった (pp.15-52)

愛知県の小中学校教師への、面接と質問紙による調査 (速水・丹羽, 2002)

子どもの感情の変化 (p.16)

頻繁に「怒り」を感じ、表出する子どもたち (p.17) 「極端に怒りやすい子どもの数が多くなった」らしい

たしなめられると「自分だけが怒られているという被害妄想がある」 怒りは一方的で、屈折

「悲しみ」にくく、「喜び」にくい子どもたち (p.20) 集団規範に左右される表出

表出されない感情 (p.23)

恐れ、驚き、面白さ (p.24)

感情日記 : B4 判に 感情「喜び、怒り、悲しみ」× 時間帯 (6-24) の枠が与えられている

中学生 2 年生 247 人を対象とした調査 (速水, 1999) ...積極的に書いた者だけの分析も

感情日記から見た若者の日常的感情 (p.26)

中学生の喜び、怒り、悲しみ (p.28) 「喜びを感じやすい人は悲しみを感じやすい」

怒りは外界、他者に由来／悲しみは自己が原因

中学生の喜び、怒り、悲しみ (p.30) 大学生 79 人を対象とした調査 (速水, 2000)

感じない子どもたち (p.33)

巖谷奈々 (2001) 『感じない子ども ころを扱えない大人』集英社新書.

最近の子どもたちは不快感自体を感じるものが少なくなっている? 「怒り」も?

荷宮和子 (2003) 『若者はなぜ怒らなくなったのか・団塊と団塊ジュニアの溝-』中公新書ラクレ

「悲しみ」と「怒り」の性質 (p.36)

悲しみ...目標の喪失、不達成への反応: 既に起きたことへの反応 (cf.恐怖) : 責任がなくても (cf.罪) :

誰の責任でもなくとも (cf.怒り) : 失った目標を再現するのは難しい (cf.怒り) :

悪い結果は不可避ではない (cf.あきらめ) 外界への二重のアピール

怒りには、他者に向かうもの、自分に向かうもの、の二つがある

感情の文化差 (p.38) 地理的差異の例示、時代的差異、変化の可能性...五木寛之「悲しみの希薄化」

悲しみ量の歴史的变化 (p.39) 「悲しみの文化」の減少／「怒りの文化」の増大...間接的証拠

作文から見る (p.40) 1940-50 年代／1990 年代の子どもの作文に含まれる感情表現を比べると減少

流行歌から見る (p.42) 松島 (1984) 「かなしい」、藤川 (1999, 2000) 最近の「根拠なき自己肯定」

映画から見る (p.43) 佐藤忠男 (1987) 『日本映画と日本文化』...1950 年代半ばの映画表現の変化

個人的怒りの増大 (p.45)

悲しみは減っている 怒りは減っていない...自尊感情が傷つけられることへの怒りの拡大?

## 貧しさから豊かさへ (p.47)

物質的豊かさが悲しさを減らした 別れの意味の変質

## 権威主義から民主主義へ (p.48)

かつて権威主義的、抑圧的だった学校は「民主主義」が定着した

千石 保 (2001) 『新エゴイズムの若者たち-自己決定主義という価値観-』 PHP 新書.

## 宗教の衰退 (p.50) 禁欲主義を美化する傾向の後退

## 集団主義から個人主義へ (p.51)

集団主義：悲しみ→助け

個人主義：悲しみ→弱み...戦う「怒り」こそが必要

「疎外感やナルシスト的な自己陶醉に対して無防備にし、狭い自己関心の追求へと導く」

「個人主義社会での攻撃性が高まり、暴力が日常的に発生する」？

第一章で著者は、戦後数十年の時間の長さの中で、「悲しみ」は後退し、「怒り」が増大してきたという認識を提示し、それに整合的な傍証となる議論を様々な形で紹介する。その中には、自分の研究成果もあれば、他人の文章の牽強附会気味の引用もある。

著者が言いたいことは、要するに、

現代日本は豊かになり、個人主義的になってきた結果、悲しみの文化から、底の浅い怒りの文化へ移行してきたと言えるのではないだろうか ...ということである。

著者の論述の重点は、アイデアの提示にあり、行論には、突っ込みを入れられる粗雑な部分も多い。本書の中心となる「**仮想的有能感**」はまだ登場しない。

参照される文献は、速水自身に関わる調査の結果と、新書レベルの一般書が多い。

文献表示については、『他人を見下す若者たち』 [参考文献/外部リンク](#) を参照のこと。

### \*五木寛之の引用:

五木寛之『情の力』講談社 2005, p.20

「いま、人間は感情が潤れていると思う。五感の感覚とか感性は非常に優れていても、やはりそれ以上に大切なのは情ではないか。しかし、いまは『感情』という言葉でさえ、『あの人は感情的な人だ』とマイナスの意味で使われることが多い。なぜ人間が感情的でいけないのでしょうか。感覚と情念のふたつが重なって、はじめて感情になるのです。悲しいときは泣き、涙がぼろぼろとあふれ出るようなところのみずみずしさを失いたくないと思うのは、私ひとりでしょうか。」